THE
MERCURY
SYMPHONY
ORCHESTRA

29th
REGULAR
CONCERT

水星交響楽団

第２９回定期演奏会

2002年1月20日（日）

東京芸術劇場大ホール

WELCOME & PROGRAM

ご挨拶

本日はお忙しいなか私ども水星交響楽団の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

当楽団は1984年に一橋大学管弦楽団の若手有志を中心に結成され、年に2回の定期演奏会のほか、小編成の曲目を演奏する「チェンバーシリーズ」と銘打った演奏会や、オルフ祝祭合唱団との完全舞台上演形式によるバレエ公演などをメインの活動として参りました。活動の拠点は一橋大学のある東京都国立市で、現在でも一橋大学管弦楽団の部室をお借りして常任指揮者の齋藤先生のご指導をうけ月に3回程度の練習を行っております。

さて、今回のプログラムは前々回の定演で「復活」を取り上げて以来のマーラーを中心にしておりますが、前回マーラーの第５番を取り上げた時も、期せずしてその前々回はやはり「復活」でした。前回のマーラー第５番から１１年を経てメンバーがおそらく８割くらいは入れ替わっているにもかかわらず同じパターンを繰り返すのは「歴史は繰り返す」という言葉だけでは語り尽くせない印象があります。当時はバブル経済の絶頂期を迎えつつある状況でしたが、空前の不況である現在、当時の反省を踏まえつつ新しい音楽像を打ちたてようという意識があるのでしょうか。前回もステージに乗っている私にはなんとなくですがそのように感じられて仕方ありません。新世紀を迎え新時代の水響を占う清新な演奏を行えればと思っております。

また、今回は、昨年11月に行った当楽団初の演奏旅行である長野演奏旅行を受けての定演となります。演奏旅行は長野の皆様の温かいサポートにより何とか成功裡に終えることができましたが、今回はその御礼の意味も込めて熱い演奏を行いたいと考えております。

最後になりましたが、今回バルトークの協奏曲で共演させていただいた新進気鋭の熱血ヴィオラ奏者坂口翼さんをはじめ、様々な面でお世話になっている一橋大学管弦楽団の皆様、そして誰よりも、意欲ばかりで実力の伴わない我々を辛抱強くご指導いただいている常任指揮者の齊藤栄一先生に厚く御礼申し上げます。
それではごゆっくりお聴きください。

水星交響楽団運営委員長　植松隆治

■レナード・バーンスタイン　政治的序曲「スラヴァ！」

Leonard Bernstein　*Slava! (a political overture)*

■ベーラ・バルトーク　ヴィオラ協奏曲（遺作）～ティボル・シェルイの補作による

Béla Bartók　*Concerto for Viola and Orchestra (posthumous work) ～Prepared for publication by Tibor Serly*

第１楽章　モデラート　*Moderato*
第２楽章　アダージョ・レリジオーソ～アレグレット　*Adagio religioso ～ Allegretto*
第３楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ　*Allegro Vivace*

ヴィオラ独奏　坂口　翼　*Tsubasa Sakaguchi*

■■■■■■■■■■■■（休憩15分）■■■■■■■■■■■■

■グスタフ・マーラー　交響曲第５番

Gustav Mahler　*Symphonie V*

第１部	第１楽章	葬送行進曲。荘重な歩みで、厳格に、葬列のように。
I	*1.Satz*	*Trauermarsch. In gemessenem Schritt. Streng. Wie ein Kondukt.*
	第２楽章	嵐のように激動して。最上級の激しさをもって。
	2.Satz	*Stürmisch bewegt. Mit größter Vehemenz.*
第２部	第３楽章	スケルツォ。力強く、速すぎずに。
II	*3.Satz*	*Scherzo. Kräftig, nicht zu schnell.*
第３部	第４楽章	アダージェット。非常にゆっくりと。
III	*4.Satz*	*Adagietto. Sehr langsam.*
	第５楽章	ロンド－フィナーレ。アレグロ・ジョコーソ。快活に。
	5.Satz	*Rondo-Finale. Allegro giocoso. Frisch.*

指揮　齊藤　栄一　　管弦楽　水星交響楽団

齊藤　栄一

（さいとう　えいいち）

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に学ぶ。また、1981年には、京都大学交響楽団とともに2週間にわたりドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮する。1982年には、関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。1984年より、水星交響楽団の常任指揮者に就任。1995年には東京文化会館で水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団、佐多達枝バレエ団と、完全舞台形式「カルミナ・ブラーナ」を、また、一昨年3月にはラヴェルの舞踊交響曲「ダフニスとクロエ」全曲を指揮。現在、明治学院大学教授。

坂口　翼

（さかぐち　つばさ）

長野市出身。3歳より才能教育研究会にてヴァイオリンを始める。その後中澤きみ子、澤和樹の両氏に師事。東京芸術大学付属高等学校入学と同時にヴィオラに転向。第８回日本クラシック音楽コンクール弦楽器部門において第２位（１位なし）を受賞。1998年ヴェルディ芸術文化振興会よりPFA賞を受賞。これまでにイギリスのInternational Musicians Seminar オランダのHolland Music Sessionsなど世界各国の講習会に参加。今井 信子、ThomasRiebl、GeorgHamnn、Wolfram Christ、の各氏に師事する。テレビマンユニオン主催ヴィオラスペースの公開マスタークラスを2000、2001年連続して受講、サイトウキネンの室内楽勉強会にも参加する。また大学の推薦を受け別府アルゲリッチ音楽祭に参加した他、アメリカ同時テロ発生の為中止となった日英の文化交流を目的とした「JAPAN2001」の芸大シンフォニアのイギリス公演への参加も決まっていた。その他芸大代表として室内楽の分野においても活動している。現在東京芸術大学2年生に在学中。菅沼準二氏に師事。

曲目解説

■レナード・バーンスタイン　　政治的序曲「スラヴァ！」

お正月気分もようやく抜けて、仕事もいつものペースを取り戻し、受験生や学生は試験に向けてラストスパートといった風情のこの時期に、この会場に足を踏み入れた皆様は、ステージ上に並ぶおびただしい数の楽器、とくに打楽器群に目を見張るのではないでしょうか。終わったばかりのお正月がまたやって来たかのような賑やかさ。そして演奏者が入場してくるとさらにびっくり。エレキギターやサックスなど、ふつうのオーケストラではお目にかかれない珍しい楽器がぞろぞろ出てきますし、曲が始まると途中で天井のスピーカーから効果音まで飛び出してくることになっていて、またまたびっくりです。

水響が１月に定演を行うのは今回が初めてです。そこで、今日の演奏会のオープニングには、ご来場の皆様に、２０日遅れではありますが、お正月気分を味わっていただく最上のエンターテインメントをご用意しました。わずか数分の短い曲ですが、どうか目と耳で、そして全身で、音楽の楽しさを体感していただきたいと思います。

「スラヴァ（Slava）」とはロシア語で「栄光あれ」といった意味ですが、世界的なチェリストでありまた指揮者でもあるムスティスラフ・ロストロポーヴィチに友人たちがつけたニックネームでもあります。「スラヴァ！」は１９７７年、ロストロポーヴィチがワシントンのナショナル交響楽団の音楽監督に就任したのを祝って書かれました。副題の「政治的序曲」というのはワシントンという土地柄を意識したものとされており、天井のスピーカーから流れる効果音というのも実は過去のあまたの政治家の演説をコラージュした録音テープなのです。しかし「政治的」というのはおそらく単にそればかりではなく、ロストロポーヴィチが当時の冷戦下にあって、母国ソ連での度重なる反体制的言動を咎められて国外退去処分を受け（１９７４年）、奇しくも西側の中心であるワシントンに音楽活動の拠点を移すことになったことへのある種の感慨、そして何よりも自由社会の懐の深さへの賛美の意味が込められているに違いありません。

このように書きますと、なんだか小難しそうで、さっき「最上のエンターテインメント」と言ったのは何なのかと懸念されるかもしれませんが、心配は無用です。曲はあくまでお祝いの音楽ですし、しかも書いたのは、あの「ウェスト・サイド・ストーリー」（注）の楽しいミュージカルピースをいくつも残した、レナード・バーンスタインなのですから。

楽譜の冒頭には「速く、炎のような勢いで（Fast and flamboyant）」との指示があり、いきなり全楽器の上向グリッサンドで派手に始まります。速いマーチのリズムに乗って、トロンボーンの陽気なメロディ、トランペットのジャズ奏法など、次から次へと見せ場を惜しげもなく披露して、８分の７拍子の中間部に入ります。ここで活躍するのがエレキギターとサックス

(ソプラノサックス) で、この２本のユニゾンで新たなメロディが奏された後、くだんの「政治家の演説テープ」が流れます。オーケストラの中でこれらの異色の楽器（？）がどのように響くのでしょうか、演奏する我々自身も興味津々です。最初のマーチに雰囲気が戻ると、もうあとはひたすら盛り上がり、ステージ最上段で収まりきらずに下手（舞台左側）まで張り出した打楽器も総動員されて狂喜乱舞の世界、祝祭の気分が絶頂に達したその瞬間に、突如音楽が静止します。

ここで最後の演出が皆様を待ち受けています。エレキだの録音テープだの、ありとあらゆる人工的な音源を使い尽くしたあとには、もうこれしかありません。この最後の演出とともに、怒涛の５分間が、まさにあっという間に終わりを告げます。今年皆様に「栄光」が訪れますように！

(注) 昨年１１月の水響長野出張公演では「ウェスト・サイド・ストーリー」からのメドレーを演奏しました。水響では、指揮者また作曲家としてのバーンスタインの情熱溢れる音楽性と人間性が熱烈に信奉されており、マーラーを採り上げることが多いのはそのせいもありますが、バーンスタイン自身の曲も幾度となく演奏しています。ちなみに信奉者の筆頭は自らを齊藤‘レニー’栄一と名乗る常任指揮者の齊藤さんです。

■ベーラ・バルトーク　　ヴィオラ協奏曲（遺作）～ティボル・シェルイの補作による

バルトークは、同時代のドビュッシー、ストラヴィンスキー、ラヴェル、シェーンベルクらとともに、２０世紀前半を代表する作曲家のひとりです。第二次大戦勃発後、ナチスに踏みにじられた祖国ハンガリーを後にアメリカに渡りましたが、晩年はもともとの社交下手な性格に白血病が追い討ちをかけ、戦後間もなく不遇のうちに死を迎えることとなってしまいました。

アメリカに渡るまでは舞台作品や弦楽四重奏曲等を中心にかなり前衛的・攻撃的な作品を書いていました。しかしその活力の源は、実はドイツ的・伝統的なスタンダードの音楽への反感であり、さらにそれを突き動かしたものは、ハンガリーの地に根ざした豊かな民族音楽の蓄積だったのです。バルトークは発明されたばかりの巨大な蓄音機を担ぎ、精力的に国内各地を回って、民族音楽の蒐集を行い、採譜して記録に残す作業を続けました。

それらが作品の中で高度に結晶した結果が、その前衛性だったわけですが、渡米後は恵まれぬ境遇の中で、同郷の指揮者フリッツ・ライナー、ヴァイオリニストのヨゼフ・シゲティらの友情に励まされたり、クーセヴィツキーから作品を委嘱（これがバルトークの代表作「管弦楽のための協奏曲」です）されたりした影響もあってか、作風に温かみと円熟味が増すこととなりました。

「ヴィオラ協奏曲」は、そうしたバルトークの最終期の、というよりも未完に終わった遺作です。作曲は彼の死の年、１９４５年の１月に、ヴィオリストのウィリアム・プリムローズの委嘱により始められましたが、健康状態の悪化により筆は思うように進まず、９月に未完のままバルトークは生涯を閉じ、その草稿だけが残りました。草稿は、ヴィオラのソロパートはほぼ完成されていましたが、曲全体の構成とオーケストレーションはほとんど手付かずの状態であり、バルトークの弟子であるティボル・シェルイの、補作というよりも実際は創作に近い作業を経て、ようやく４年後に完成にこぎつけました。

できあがったものについては、「バルトーク本人ならこんな単純なつくりにはしないだろう。参考作品にすぎない」などという批判もあるようですが、実際に聞いてみると、ヴィオラの名人芸は言うまでもなく、曲全体についても、他の晩年の作品同様、簡にして要を得た老練たる技法を想像させるに十分であり、明快な構造の中に、深い瞑想性と民族性の昇華の形を感じとることができます。

こうした素晴らしい、しかもアマチュアでは滅多に演奏されることのない曲を、今回将来を極めて嘱望される新進気鋭の熱血ヴィオリスト坂口翼さんと一緒に演奏できる機会に恵まれたことは、我々にとって本当に幸せなことです。坂口さんは長野市のご出身で、昨年の１１月に長野で行った出張公演のときからのお付き合いなのですが、気さくでしかもヴァイタリティにあふれ、我々も坂口さんから練習、本番を通じてたくさんのエネルギーをもらいました。長野公演の際は「ヴィオラってこんなに大きくて渋い音がするんだあ」といった初歩的な感動から、「高音はヴァイオリンと同じように出るのに、低音の魅力もあって、ゾクゾクしちゃうわね」「翼ちゃんってほんと豪快ね。夜通しコンパしても全然平気だしね。それにしても、若いのにどうしてあんなにスケールの大きな音楽を湧き出させることができるのかしら」といった、若さへの羨望も混じった本質論（？）まで、様々な驚きの声が聞かれました。今日は２回目の本番になりますが、長野のときにも増して、坂口さんと呼吸を合わせ、コンチェルトの醍醐味をオーケストラとしても味わい楽しむことが出来ればいいなと思っています。

曲は伝統的な３楽章構成をとっていますが、切れ目なくアタッカで演奏されます。第１楽章は全体の長さの３分の２近くを占める中心的な存在で、中庸な速さの中で、ヴィオラがオーケストラと絡み合いながら名人芸を存分に発揮していきます。第２楽章は曲想ががらっと変わって、宗教的な敬虔さをもってゆっくり進みますが、間もなくティンパニとホルンの強打で断ち切られ、テンポが上がって次の楽章を準備します。第３楽章は速いハンガリーの民族舞曲で、少し遅い土俗的な舞曲を挟んだ後、最後は再びテンポを上げて、ヴィオラの超絶技巧とともに華やかに曲を締めくくります。

■グスタフ・マーラー　　交響曲第５番

我々水響はよくマーラーの交響曲を演奏します。直近では「第２番『復活』」を２０世紀末のメモリアルとして演奏しましたし、以下新しい順に、７番、６番、３番、５番、２番、４番を採り上げています。また、９番は水響内で圧倒的熱烈支持を受け、特別な意味を持つ作品で、幾度となく内輪での演奏会を行い、一説によると「もう暗譜で弾ける」とか、管楽器や打楽器などでは「全パート制覇した」といった強者までいるほどです。

このように水響でマーラーが採り上げられることの多い理由は、規模が手頃（？）だ（手っ取り早く管楽器の人数が掃ける)、ということももちろんありますが、やはり水響の得意分野である「情念系」音楽の代表的作曲家ということが大きいと思われます。音楽として時に醜悪であることすら厭わず、心のままをさらけ出していくマーラーの音楽が、水響オケメンの多くを占める、表面的には勤勉実直なサラリーマンの、仮面をかぶった心の奥底を揺り動かし、人生の在り方を問い、感情移入を誘発させずにはおかないのでしょう。

さて、本日の「第５番」は上記のとおり、水響では（昨年１１月の長野公演も含め）再演ということになります。しかし再演といっても初演は１０年以上も前（１９９０年５月）ですし、当時のメンバーはいまではごくごく少数なので、事実上は一からのスタートになりました。５番はマーラーを論ずるときによく引き合いに出される「分裂症的気質」もそれほど顕著でなく、ベートーヴェンの「運命」と同様、「苦悩を通しての歓喜」といった一貫したテーマを持つようにも聞こえ、比較的難解さ

は少ない作品であると言えるのですが、一方で管弦楽法は精緻を極め、随所に超絶技巧が散りばめられているため、実際に取り組んでみると、情念だけでは対処できない高い壁が立ちはだかり、その征服には思いのほか時間を要しました。
しかし一度その壁を乗り越えてしまえば（開き直ってしまえば…）、もうなにしろマーラーは齊藤／水響の十八番ですから、情念の火の玉が、少なくとも３分間に１回の割合で、貴方に襲いかかることは確実です。どうぞご用心くださいますよう…。
前置きが長くなりました。それでは曲の説明に入っていくことといたしましょう。

マーラーは１８６０年にボヘミアの寒村で、ユダヤ人の酒屋の息子として生まれました。
当時、この場所はオーストリア帝国の支配下にありましたが、ドイツ、ユダヤ、スラブの三重文化圏でした。ここで生まれ育ったマーラーは、多様な文化に触れると同時に、帰属する文化がないことにも気づかされます。１５歳でウィーンに上京、４７歳でアメリカに渡り、５１歳で生涯を閉じるまで、指揮者としてまたドイツ・ロマン派最後の作曲家として活動を続けましたが、終始文化的アイデンティティの欠如に悩みました。
マーラーの交響曲は、世紀末ウィーンの成熟した芸術の香りをたたえ、大規模かつ巧みなオーケストレーションと相俟って、壮大な音の絵巻物を繰り広げます。しかしその推移をもう少し詳しくみると、アルニムとブレンターノの編による民謡詩集「子供の魔法の角笛」などに影響を受け素朴な叙情をたたえた前期の交響曲（４番まで）、音楽の純粋性が高まる一方で内的な感情の起伏や分裂が激しくなる中期の交響曲（５～７番）、病気を契機とした人生への諦観と絶頂の創造力との同居による想像を絶する内面世界の表現となった終期の交響曲（８～１０番）、といったマーラーの心境変化の歴史をたどることができます。それはまさに、帰るべき文化を持たないマーラーの不安定な気持ちをそのまま表しているのかもしれません。
「第５番」が作曲された１９０１年は、マーラーにとって激動の年でした。まず第一に、ウィーン国立歌劇場の指揮者に就任し、以後極めて多忙な毎日を送ることになったこと、第二に、結婚し新生活の開始による生への執着を持つと同時に、仕事での神経の酷使や疲労から持病の心臓病が再発し、一方で死を強く意識せざるを得ない状況となったことです。５番が、マーラーが青年時代の感覚から離れ、新しい表現内容を求めて更なる高みへと登っていく最初の作品になったのは、こうした環境の変化が大きく影響したと言えるでしょう。

第１楽章
葬送を告げるトランペットのファンファーレで始まり、続いて弦や木管楽器が押し殺した悲しみの主題を粛々と奏でます。しかし突然テンポが上がり、こらえていた涙が堰を切って溢れ出したかのように、感情がこれでもか、これでもかとぶつけられます。その後はもう涙も枯れ果て、葬送の足取りはいっそう重くなり、別の主題が現れてなぐさめようとしてもまったく効果なく、一気に悲しみの頂点を迎えます。最後は潮が引くように鎮まっていき、低弦のピチカートによって、首を掻き切られるように終わります。
マーラーはここでいったい何を葬ったのでしょうか…。

第２楽章
低弦の激しいフォルティシシモが、この楽章の容易ならざる事態を予感させますが、すぐに収まり、第１楽章の葬列のテーマを変形した、なだめるような旋律が奏でられます。この急緩はもう１度繰り返されますが、３度目になると感情を抑えることはもうできません。すなわち急のまま緩は出る幕もなく、ひたすら激情が叩きつけられていきます。やはりこの楽章は容易ならざる楽章でした。髪を振り乱して泣きわめき、拳を振り上げて怒り、叫び、震えます。これほどまでになりふり構わず自己をさらけ出す音楽が、音楽として存在し得るものなのかと思わずにはいられません。その後一瞬、金管のファンファーレで光が差し込むものの、すぐに暗鬱な激情と、諦めの感情にも似たコーダにかき消されてしまいます。

第３楽章
前の２楽章とは打って変わって、生命感に溢れた華やかな雰囲気のワルツが繰り広げられます。この楽章では、第１ホルンが「オヴリガート・ホルン」としてソリスティックに扱われ、大活躍します。このホルンに導かれた木管楽器による楽しい舞曲に、弦楽器によるやや内面的なワルツが続き、クライマックスを迎えては中断し、終わったかと思うとまた始まるというパターンを幾度となく繰り返しながら曲は進みます。進むにつれ、忘れかけた前の２楽章の内的混乱と悲しみが頭をもたげ、スケルツォという言葉の意味とは正反対の重苦しい雰囲気に支配される場面も出てきますが、やはり何事もなかったかのように最初に戻ったりして、少し分裂症的な性格が感じられる楽章でもあります。何度やったら終わるのでしょう、繰り返しによる麻痺効果で頭が真っ白になってきた頃に、突然テンポが上がり、嵐のようなコーダで曲を閉じます。

第４楽章
マーラーらしい透明で繊細な美しさが、世紀末的なある種の頽廃をも伴いながら、弦楽器とハープによってゆったりと紡ぎ出されていきます。ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画「ヴェニスに死す」のＢＧＭにも使われて一躍有名になりました。マーラーをモデルとしたとも言われる主人公エシェンバッハ教授は、静養先のヴェニスで、美の化身のような少年タジオに心奪われ、当時ヴェニスに蔓延しつつあったペストからタジオを守り、自分は死ぬことで永遠に美を手に入れるのです。美しいだけの美など信じなかったエシェンバッハが、タジオをおそるおそる遠くから眺めるときの、何とも当惑したような、しかし憧れに満ちた眼差しを思い出すたび、セットでこの「アダージェット」が脳裏に浮かんできてしまう方も、決して少なくないに違いありません（チラシに使われているストライプ柄はタジオのＴシャツをモチーフにしています――デザイン：小出）。

第５楽章
夢の世界からの目覚めがホルンのロングトーンで告げられ、駆け抜けるようなフーガが始まります。しかし目を覚ました世界は、以前のような辛く苦しい世界ではなく、喜びに溢れた世界です。音楽は決して激することなく、ひたすら明るく健康的に突き進んでいきます。途中、アダージェットのメロディがリフレインされて夢の世界を回想しますが、けだるい愁いの気分はもうありません。そしていよいよ壮大なクライマックスがやってきます。金管による輝かしいコラールと、弦・木管による鮮やかな分散和音、リズミカルで豪快な打楽器群。オーケストレーションの贅と技巧と精緻を尽くしながら劇的に盛り上がって、７０分の長大な交響曲が終結します。

（横地 篤志）

OUR NEXT CONCERT

第３０回定期演奏会について

今回の演奏会が第２９回ですから、次回はいよいよ第３０回の定期演奏会となります。
演奏します曲目につきましては下記の通りですが、選曲のプロセスにつきまして若干のご説明をさせていただきたいと思います。

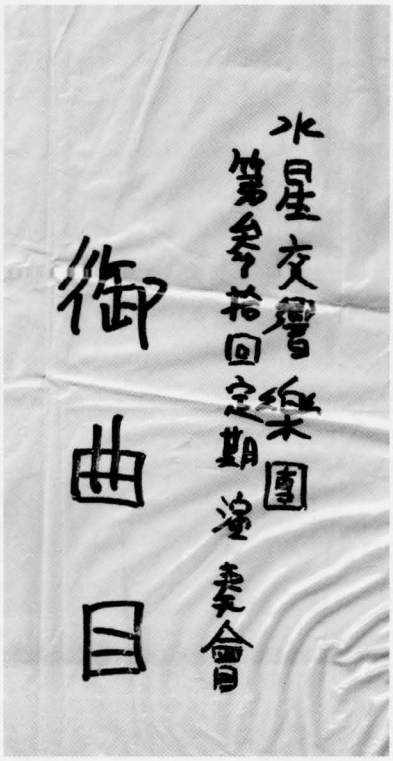
我々は今までの全ての演奏会の選曲を、各パートを代表するパートトップで構成される選曲会議における投票により行ってきたわけですが、次回の第３０回定期演奏会の選曲は、設立よりずっと常任指揮者として我々をご指導いただいてきた齊藤さんに選曲していただこう、ということになりました。

これまで１７年間、練習後の「さかえや」という居酒屋風ミーティングルームにて行われてきた練習後の反省会において、「いつかこの曲をやってはどうですか」「この曲とこの曲の組合せ、いいでしょ」と控えめにかつ巧みに我々を誘導するしか曲を主張する手段を持たない齊藤さんにお好きな曲を存分に振っていただくことで、１７年間、イレギュラーも含めると４０回以上の演奏会を振っていただいてきたことに対する我々のささやかな謝意の表明であります。

選曲の行方については団員の中に様々な憶測が飛び交い、トトカルチョも行われ、中には何とか齊藤さんに取り入ろうとやたら酒を注ぎまくるものが現れるなど、一種異様な雰囲気の中で、齊藤さんによる選曲は秘密裏に進められました。

そして遂に昨年１１月１８日、前述のミーティングルームにおいて厳粛な雰囲気の中、曲目発表が行われました。皆の期待と不安に満ちた熱い眼差しの中、齊藤さんは鞄から右のような真心のこもった（でも、へたな）字で書かれたビニール袋を取りだしました。中には三井住友銀行のＡＴＭ脇に置いてある現金封筒が３つ入っており、委員長植松氏が一つずつ開封し曲名を読み上げたのでした…。

（小出　裕之）



水星交響楽団　第30回定期演奏会のお知らせ

２００２年８月２５日(日)午後２時開演　　東京オペラシティ大ホール　タケミツメモリアル

ラヴェル：道化師の朝の歌
モーツァルト：交響曲第４１番ハ長調「ジュピター」
ショスタコーヴィチ：交響曲第７番「レニングラード」

指揮：齊藤栄一

お問合せ先：　03-3594-5654（植松）

マーキュリー・バッハ・アカデミー「第１回マタイ受難曲公演」のお知らせ

２００２年９月２３日(月・祝)午後１時開演　御茶の水スクエア カザルスホール

指揮：齊藤栄一

福音史家&テノール：川瀬幹比虎　イエス：ジュリアン・リポン
ソプラノ：金原久美子　アルト：青木洋也　バス：浦野智行

合唱：マーキュリー・バッハ・アカデミー合唱団
管弦楽：マーキュリー・バッハ・アカデミー

入場料：Ｓ席2,500円　Ａ席2,000円　　お問合せ先：　03-3993-3981（小出音楽事務所）

OUR HISTORY

これまでの演奏活動　　常任指揮者：齊藤　栄一

第１回定期演奏会　　１９８５年３月２日　一橋大学兼松講堂
シューベルト 歌劇「ロザムンデ」序曲
ラヴェル 「マ・メール・ロワ」序曲
ブラームス 交響曲第２番
(アンコール) ラヴェル　亡き王女のためのパヴァーヌ

第２回定期演奏会　　１９８６年２月８日 兼松講堂
ベートーヴェン 序曲「レオノーレ」第３番
ブラームス 悲劇的序曲
ブラームス 交響曲第４番

第３回定期演奏会　　１９８６年９月１４日 兼松講堂
モーツァルト 歌劇「魔笛」序曲
チャイコフスキー 「くるみ割人形」組曲
ベートーヴェン 交響曲第５番

第４回定期演奏会　　１９８７年５月４日
立川市市民会館
モーツァルト 歌劇「劇場支配人」序曲
ベートーヴェン 交響曲第９番　(独唱： 川藤 勢津子 他)

第５回定期演奏会　　１９８７年９月２７日 兼松講堂
エルガー「コケイン」序曲
マーラー 交響曲第４番 (独唱： 川藤 勢津子 他)

第６回定期演奏会　　１９８８年５月３日 兼松講堂
ブラームス ハイドンの主題による変奏曲
チャイコフスキー 交響曲第４番

第７回定期演奏会　　１９８８年１０月１６日
くにたち市民芸術小ホール
ドビュッシー 牧神の午後への前奏曲
プロコフィエフ バイオリン協奏曲第１番 (独奏： 矢野晴子)
ブラームス 交響曲第３番

第８回定期演奏会　　１９８９年５月３日
武蔵野市民文化会館
マーラー 交響曲第２番「復活」(独唱： 蜂谷幸枝 他)

第９回定期演奏会　　１９８９年１０月１日 兼松講堂
R・シュトラウス 交響詩「ドン・ファン」
プロコフィエフ 「キージェ中尉」組曲
ベートーヴェン 交響曲第８番

第１０回定期演奏会 １９９０年５月３日　武蔵野市民文化会館
ヴァーグナー 「トリスタンとイゾルデ」から「前奏曲と愛の死」
マーラー 交響曲第５番
(アンコール) ディーリアス 「フロリダ組曲」
より「ラ・カリンダ」

第１１回定期演奏会 １９９０年９月２３日
くにたち市民芸術小ホール
ディーリアス ブリッグの定期市
ヒンデミット ウェーバーの主題による交響的変容
ベートーヴェン 交響曲第３番「英雄」

第１２回定期演奏会 １９９１年５月３日　武蔵野市民文化会館
バーンスタイン 「キャンディード」序曲
ガーシュイン 交響的絵画「ポーギーとベス」
バーバー 弦楽のためにアダージョ
J・ウィリアムズ 「スター・ウォーズ」組曲
(アンコール) バーンスタイン「ウエストサイドストーリー」から
「プエルトリコ・アメリカ」

第１３回定期演奏会 １９９１年９月２２日　杉並公会堂
プーランク 組曲「牝鹿」
フォーレ 組曲「ペレアスとメリザンド」
チャイコフスキー 交響曲第６番「悲愴」
(アンコール) チャイコフスキー「白鳥の湖」よりワルツ

第１４回定期演奏会 １９９２年５月３日
府中の森芸術劇場 どりーむホール
エルガー チェロ協奏曲 (独奏： 金谷 昌治)
ホルスト 組曲「惑星」
(アンコール) エルガー 「威風堂々第１番」

第１５回定期演奏会 １９９２年１０月３日　立川市市民会館
ベートーヴェン 交響曲第６番「田園」
ラヴェル　スペイン狂詩曲
舞踊詩ラ・ヴァルス
ボレロ

第１６回定期演奏会 １９９３年５月９日
府中の森芸術劇場どりーむホール
マーラー 交響曲第３番 (独唱： 渡辺せつ子 合唱：
水星交響楽団合唱団、晃華学園聖歌隊)

第１７回定期演奏会 １９９４年２月６日　サントリーホール
シューマン 交響曲第３番「ライン」
ドビュッシー 「夜想曲」
ストラヴィンスキー バレエ音楽「春の祭典」
(アンコール)　サティ 「ジムノペディ第１番」
プロコフィエフ　「タイボルトの死」

第１８回定期演奏会 １９９４年１０月１日　所沢市民文化センター
指揮 森口真司
ドヴォルザーク 序曲「謝肉祭」
チャイコフスキー バレエ音楽「白鳥の湖」より
バルトーク 管弦楽のための協奏曲
(アンコール) ドヴォルザーク　スラブ舞曲第１０番

第１９回定期演奏会 １９９５年５月２８日　中野ＺＥＲＯホール
イベール 寄港地
ホルスト パーフェクトフール
ブラームス 交響曲第１番
(アンコール) ディーリアス　「春初めてのカッコウを聞いて」

カルミナ・ブラーナ実行委員会記念公演　１９９５年１２月２４日
東京文化会館大ホール
カール・オルフ　カルミナ・ブラーナ
(独唱：秋元智子ほか／バレエ：オルフ生誕１００周年記念
バレエ団／合唱：オルフ祝祭合唱団／児童合唱：新宿区少年
少女合唱団)

特別演奏会　　１９９６年１月１８日 立川市民文化会館
モーツァルト 交響曲第３８番「プラハ」
R・シュトラウス 歌劇「サロメ」より七つのヴェールの踊り
カール・オルフ カルミナ・ブラーナ
(独唱：秋元智子ほか 合唱：オルフ祝祭合唱団／児童合唱：新宿区
少年少女合唱団)

第２０回定期演奏会 １９９６年８月２４日 オーチャードホール
バーンスタイン 管弦楽のためのディヴェルティメント
マーラー 交響曲第６番「悲劇的」

第２１回定期演奏会 １９９７年５月１８日　立川市民会館大ホール
ベートーヴェン 交響曲第４番
プーランク グローリア (独唱： 北条聖子 合唱： オルフ祝祭合唱団)
レスピーギ 交響詩「ローマの祭り」

第２２回定期演奏会 １９９７年９月２１日　武蔵野市民文化会館
ボロディン　歌劇イーゴリ公より だったん人の踊り (合唱 オルフ
祝祭合唱団)
バーンスタイン ウエスト・サイド・ストーリー」よりシンフォニック
ダンス
ブラームス　交響曲第３番
(アンコール) シャブリエ 狂詩曲スペイン

チェンバーシリーズ第１回演奏会　　１９９９年１２月２７日　三鷹市　風のホール
ヒンデミット 弦と金管のための演奏会用音楽
ミヨー 舞踊音楽「世界の創造」 Sax. 田中靖人
モーツァルト 交響曲第３５番「ハフナー」

第２３回定期演奏会 １９９８年８月２１日
オペラシティ 武満メモリアルホール
コープランド エル・サロン・メヒコ
ラヴェル 左手のためのピアノ協奏曲 (ピアノ： 若林顕)
R・シュトラウス アルプス交響曲

第２４回定期演奏会 １９９９年３月１４日　サントリーホール
デュカス　交響詩「魔法使いの弟子」
チャイコフスキー　幻想序曲「ロメオとジュリエット」
ラヴェル　舞踊交響曲「ダフニスとクロエ」全曲
(合唱：オルフ祝祭合唱団)
(アンコール) ファリヤ 「三角帽子」から終曲

第２５回定期演奏会 １９９９年１０月３１日　東京芸術劇場大ホール
ガーシュウィン パリのアメリカ人
マーラー 交響曲第７番「夜の歌」

第２６回定期演奏会 ２０００年４月２３日
すみだトリフォニーホール 大ホール
ヴィラ＝ロボス：ブラジル風バッハ第４番
ガーシュウィン：ピアノ協奏曲ヘ調 (ピアノ：白石准)
チャイコフスキー：交響曲第５番
(アンコール) チャイコフスキー：眠りの森の美女からワルツ

野外音楽会　　２０００年８月１９日
くにたち郷土文化館歴史庭園
スッペ 「軽騎兵」序曲
ヴォーン・ウィリアムズ グリーンスリーブスの主題による幻想曲
シャブリエ 狂詩曲「エスパナ」
ラヴェル マ・メール・ロアより「美女と野獣の対話」「妖精の園」
ガーシュウィン キューバ序曲
本間勇輔 「古畑任三郎」のテーマ
バーンスタイン スラヴァ！
コープランド ロデオより「土曜の夜のワルツ」「ホウダウン」
アンダーソン 「タイプライター」／「舞踏会の美女」
ハチャトゥリャン ガイーヌより「剣の舞」
小山清茂 管弦楽のための「木挽歌」より「盆踊り」「フィナーレ」
レスピーギ 交響詩「ローマの松」より「アッピア街道の松」
＜アンコール＞萩原哲晶 管弦楽のためのスーダラ節
ヒナステラ エスタンシアより「マランボ」
ヨハン・シュトラウス ラデツキー行進曲

第２７回定期演奏会 ２０００年１２月１６日　東京芸術劇場 大ホール
マーラー 交響曲第２番ハ短調〝復活〟
ソプラノ 大沼美恵子　メゾ・ソプラノ 西川裕子

第２８回定期演奏会 ２００１年６月１０日　文京シビックホール
ブリテン「歌劇『ピーターグライムズ』より『４つの海の間奏曲』」
ドビュッシー「３つの交響的素描『海』」
ベートーヴェン交響曲第３番「英雄」

長野演奏会　　２００１年１１月４日　長野県県民文化会館大ホール
バーンスタイン ウエストサイド物語よりメドレー
バルトーク ヴィオラ協奏曲 ヴィオラ独奏：坂口　翼
マーラー 交響曲第５番

水星交響楽団

常任指揮者：齊藤　栄一
副指揮者：榎原　尚徳
コンサートマスター：鈴木　尚志

■1st Violin
秋山　文人
大坪　慎一郎
大軒　敬子
坂本　聰
鈴木　尚志
鈴木　牧
西端　雄一
野村　国康
浜田　浩子
福島　秀哉
福地　由樹子
福原　優子
前嶋　靖子
松本　祥世
山岸　奈緒子
米嶋　龍昌

■2nd Violin
生駒　陽子
石川　智子
川俣　三枝子
黒川　夏実
小出　明美
小林　美保子
後藤　正尚
鈴木　真由子
祐成　秀樹
土屋　和隆
徳地　伸保
前田　啓
松崎　亜紀子
吉田　健一郎

■Viola
浅井　嘉夫
有井　晶
井上　拓
川俣　英男
木村　納
田北　佐和子
永井　好
傅　冠昇
福島　恵一
松岡　正人
三上　さやか

■Violoncello
今村　文子
落合　直美
菅田　克彦
鈴木　皇太郎
高原　学
橘　温子
東郷　丞
中山　佐知子
日吉　実緒
前田　秀紀
三輪　恭子
能岡　雅人

■Contrabass
大槻　智子
大西　功
金子　千春
刈田　淳司
長屋　裕大
福原　祥公
藤本　宏行
本多　美佐子

■Flute
岡本　淳子
川崎　裕恵
西村　かよ子
本田　洋二

■Oboe
井本　もい
上田　覚
小出　裕之
野口　秀樹

■Clarinet
大山　泰広
河西　亮子
西村　伸吾
横地　篤志

■Saxophone
小山　弦太郎

■Fagotto
清家　慎一
冨井　一夫
佐藤　寛治

■Horn
伊集院　正宗
榎原　尚徳
岡本　真哉
尚子
北　典子
桑名　久美三
小松　泰三
佐藤　真一
山形　尚世

■Trumpet
浅田　健二
家田　恭介
岩瀬　世彦
金子　恭江
桜井　新
田玉　詩織
宮崎　幸恵

■Trombone
櫻井　統
佐藤　幸宏
瀬古　義久
高橋　康昭
中村　佳央

■Tuba
植松　隆治

■Percussion
石井　浩史
石川　誠
岸　敦子
高橋　淳
野川　真木子
野口　直子
矢内　夏希
山本　勲
吉村　恵一
渡辺　麻子

■Piano
石川　美幸

■Harp
東森　真紀子

■Electric Guitar
蓮見　昭夫

一橋大学管弦楽団スプリングコンサート2002のお知らせ

２００２年４月１４日（日）13：30開場　14：00開演
東京芸術劇場　大ホール
ベートーヴェン：序曲「コリオラン」　バルトーク：舞踏組曲　ブラームス：交響曲第４番
指揮：田中一嘉

お問合せ先　090-9814-5047（矢内）